

第7回 環境研究機関連絡会 研究交流セミナー
日 時: 2025年11月11日(火)13:00~
テーマ: 循環経済と自然再興の関連研究

ポテンシャルを引き出すための 循環経済と自然再興に向けた 地域デザインの役割

筑波大学・芸術系 教授

筑波大学・健幸ライフスタイル開発研究センター 副センター長

藤田 直子



筑波大学
University of Tsukuba



Landscape Ecological
Design & Planning
Research laboratory
F lab. Fujita Lab., University of Tsukuba
from 2019 (Fujita Lab., since 2019)

本発表のねらい：循環経済と自然再興の「統合」

第6次環境基本計画が示す「統合的向上」への着目

▶日本学術会議は、その戦略として「循環経済・自然再興・炭素中立」の3軸同時達成の必要性を提言

3つの危機と解決のカギ

筑波大学の強みと貢献



課題は、循環経済と自然再興の「統合」を阻む「分断」構造

◆筑波大学の「学際性」を活かした社会課題解決アプローチ

- ◆いくつものシナジー(相乗効果)を生む
- ◆「分断」を乗り越え、地域の真のポテンシャル(経済・環境・健幸)を引き出す鍵こそが「地域デザイン」

なぜ「統合」は難しいのか？：目的とアプローチの分断

分断01

サーキュラーエコノミー

循環経済のアプローチ

主な目的: 資源効率性、廃棄物ゼロ、脱炭素

主な担い手: 産業界、経済セクター、工学分野

主な関心: 「モノ」と「経済」の循環
(リニアからサーキュラーへ)

分断02

ネイチャーポジティブ

自然再興のアプローチ

主な目的: 生物多様性保全、生態系サービス回復

主な担い手: 行政、NPO/NGO、農学・生態学分野

主な関心: 「生命」と「生態系」の循環
(劣化から再生へ)

—●—
<何が問題か？>

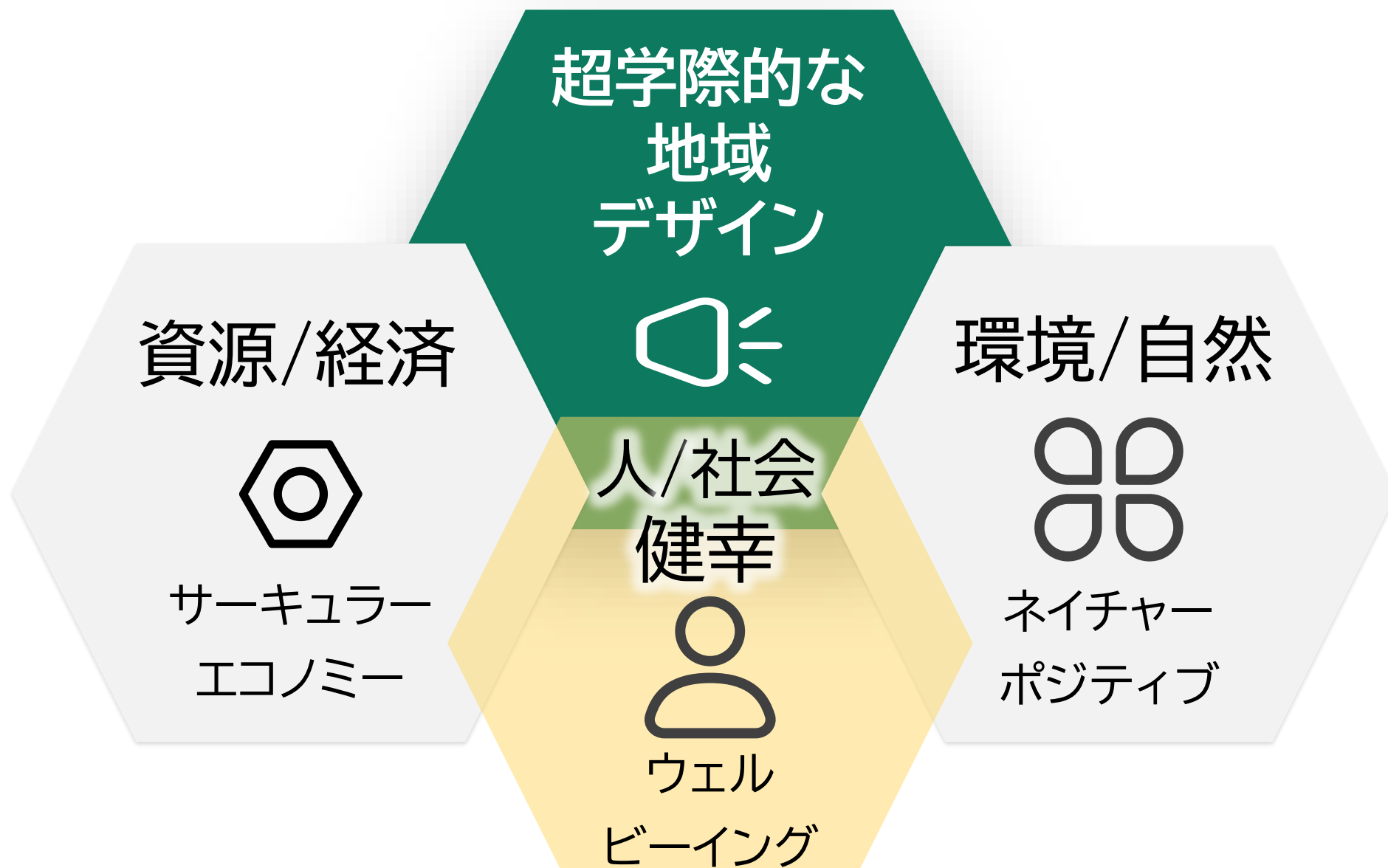
両者の接点・相乗効果が「デザイン」されていない



<その結果…>

ポテンシャルが最大化されない

「統合」の鍵は「超学際的な地域デザイン」にある



「統合」の鍵は「超学際的な地域デザイン」にある

「超学際的」とは？

- ◆ 超学際研究(Transdisciplinary Research)
- ◆ Future Earth(フューチャー・アース)
- ◆ 市民と研究者が課題設定から社会実装までを担う

「地域デザイン」とは？

- ◆ 単なる景観やモノの設計(Design of Objects)ではない
- ◆ 地域固有の「資源/経済」「環境/自然」「人/社会/健幸」の間の「望ましい関係性の設計(Design of Relationships)」である

「超学際的な地域デザイン」とは

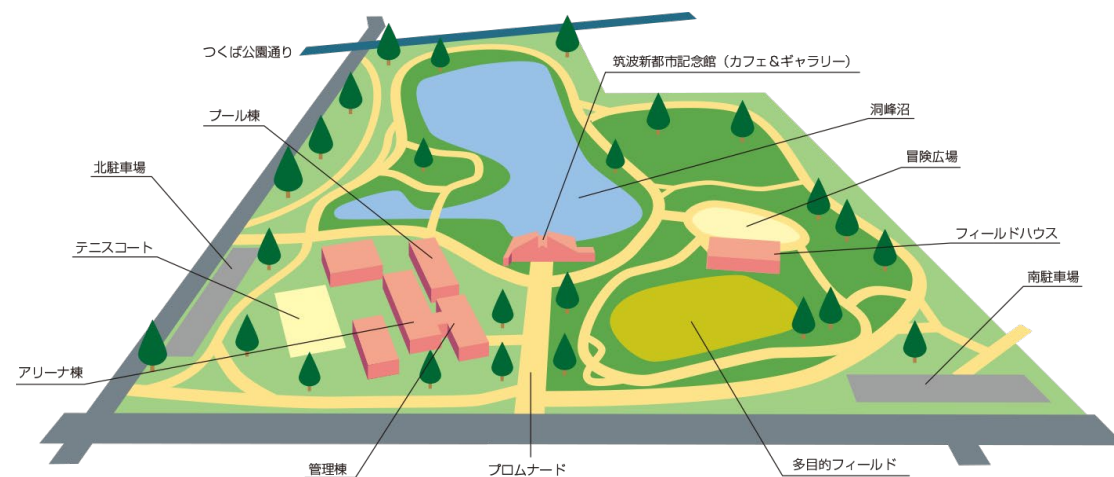
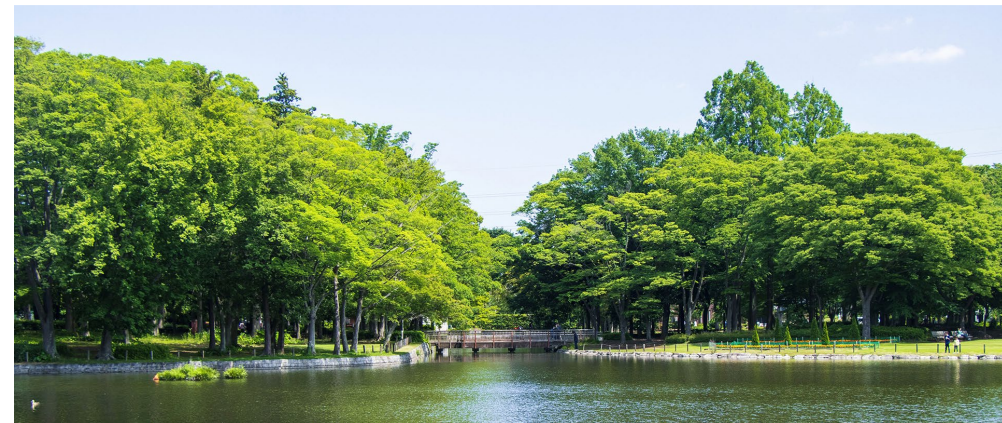
- ◆ 地域社会の共通目標に向けて統合する「実践的プロセス」
- ◆ 異なるステークホルダーを、課題設定の段階から繋ぐ
- ◆ 超学際研究の方法論と位置づける



例えば・・・：つくば市「洞峰公園」

洞峰公園とは

- ◆ 1980年(昭和55年)、筑波研究学園都市のシンボルとして整備
- ◆ つくば市内にある唯一の総合公園
- ◆ 大きな池や体育館、ランニングコースがあり、市民の憩いの場
- ◆ 40年以上にわたり「行政主導の管理運営」が続いてきた



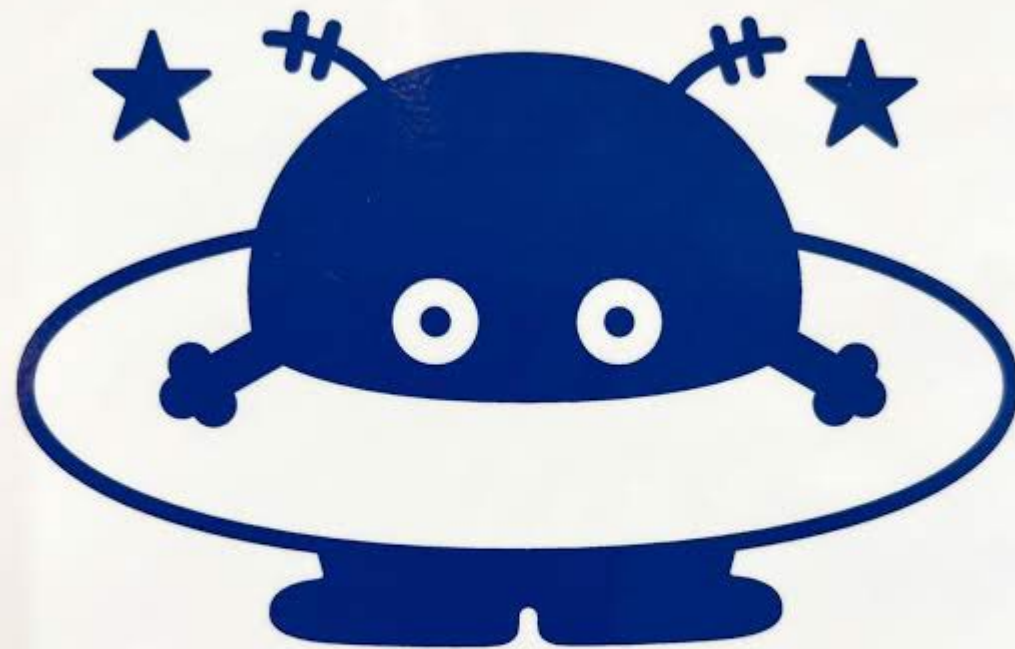
例えば・・・ :つくば市「洞峰公園」



洞峰公園とは



- ◆ 1980年(昭和55年)、筑波研究学園都市のシンボルとして整備
- ◆ つくば市内にある唯一の総合公園
- ◆ 大きな池や体育館、ランニングコースがあり、市民の憩いの場
- ◆ 40年以上にわたり「行政主導の管理運営」が続いてきた

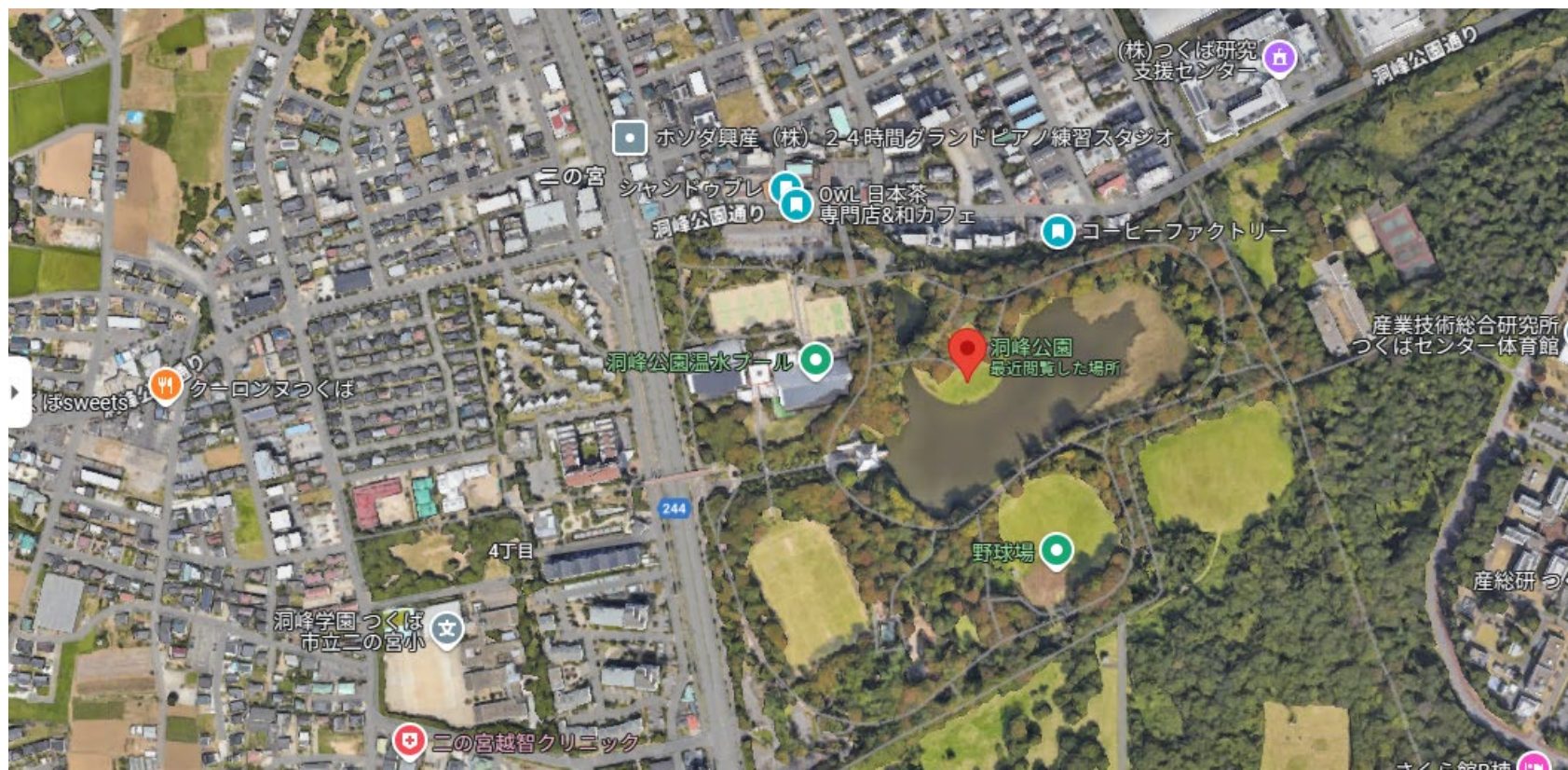


EXPO'85

公園の危機 「グランピング、樹木伐採、ビール工房」

もともとは茨城県営の公園だった洞峰公園

- ✓ 県は、パークPFIという制度を使って、民間活力の導入を検討
- ✓ 採択されたプランは、グランピング、樹木伐採、ビール工房、24時間フィットネスジム



市民が立ち上がった！ 改変の阻止、無償譲渡、そして協議会設立へ



市民が立ち上がった！ 改変の阻止、無償譲渡、そして協議会設立へ



出典:LuckyFM 茨城放送



「自分たちの公園は
自分たちで守り、育て
よう」という機運が高
まる



つくば市長が県営公
園の市営化(譲渡)を
宣言



公園の未来を考え
る「協議会」を設立



周知イベント



利用者や地域住民
が中心となる「分
科会」を設ける

公園が「じぶんごと」になる瞬間

洞峰公園で起こった事から見えてくること

主体的な関わりを通して、公園が「公共のもの」から「私たちのもの」へと、意識が変わっていく

間接的に（無自覚的に）市民が「循環経済」「自然再興」を選択した事例と評価できる



循環経済と自然再興を統合するデザインプロセス

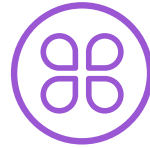


ステップ 1

地域のポテンシャル分析
(診断)

可視化

- ◆ 埋もれた資源
- ◆ 自然資本(再生の場)
- ◆ 人的資本(担い手)



ステップ 2

「健幸」な未来ビジョンの共創
(対話)

- ◆ 地域住民と共に、循環経済と自然再興が実現した「望ましい暮らし」を描く
- ◆ 統合の「目的(Goal)」を共有



ステップ 3

統合的システムのデザイン
(実装)

- ◆ 資源循環と自然再生を「同時に」実現する具体的な仕組み・事業を設計する

このプロセス自体が、
異分野(産業・環境)のステークホルダーを繋ぐ「共通言語」として機能する

成功の力ギ:「社会的触媒」と「いつのまにか」

主体的な関わりを通して、市民は「自分ごと」へと、意識が変わっていく



成功の力ギは・・・
社会的触媒
=社会的潤滑油
(Social Lubricant)



成功の力ギは・・・
「いつのまにか、
そうになっていた」
(研究は、直接的でなく、裏で)

「社会的触媒(社会的潤滑油)」とは

課題: 分野の壁と「自分ごと」の欠如

「専門家はたくさんいるのに、課題がなかなか解決しない」それは、分野の壁と、多くの人にとって課題が『自分ごと』になっていないから

解決: 社会的触媒を介して「自分ごと」に

アルコールなどに代表される人間関係の円滑化に役立つ共通点の活用

医療

環境

経済

福祉

教育

+



=

新しい未来

例えば・・・:「イヌ」を社会的触媒にして、循環経済と自然再興が市民の「自分ごと」に



- ❑ 課題が複雑化する現代、専門分野の壁が解決を阻むことが。しかし「愛犬のため」なら、難しい話も”自分ごと”に。
- ❑ 人口あたりの博士が日本一多い茨城県つくば市。
- ❑ イヌは、専門家と市民、行政と企業をつなぐ「共通言語」となり、新しい発想を生む触媒に。

犬の登録頭数、県内 **1** 位

15,331 頭

(令和2年時点)

多くの市民が犬を愛し、犬とのより良い暮らしを求めています。これはつくば市の隠れた、しかし巨大なポテンシャルです。

ステップ1:あなたのアイデアが研究のタネになる！ 大規模研究シーズ調査

『あなたの専門や得意なこと』と『愛犬との暮らし』を
掛け合わせたら、どんな面白いことができますか？

- ◆ つくば市の研究者や全市民、約30万人を対象とした大規模アンケートを実施。
- ◆ 「どんな小さなアイデアでも、未来を変えるヒントになる」というメッセージとともに参加を呼びかけ。



8つの挑戦「呼び水研究」



異分野融合のきっかけを作るため、筑波大学の多様な専門家が8つのユニークな研究をスタート。これらが新しいコラボレーションを生む「呼び水」となる。

人文社会

イヌと環境伝統知

歴史を探る：イヌは”知のパートナー”だった？先住民族の伝承から、イヌが人間の知識形成にどう影響したかを探ります。

人文社会

イヌと表象文化

物語を解く：忠犬ハチ公はなぜヒーローになったのか？物語や映画が犬のイメージをどう作り、社会に影響を与えたか分析します。

芸術デザイン

ドッグランと生物多様性

空間を創る：犬が喜ぶ公園は、自然も元気にする？未利用地を活用し、人と犬、そして地域の自然にも良い空間デザインを実証します。

芸術デザイン

イヌの感性と行動の可視化

気持ちを知る：愛犬は今、何を感じている？最新技術で犬の感情を”見える化”し、犬が本当に喜ぶ製品開発に繋がります。

医学医療

イヌとコミュニティナース

孤立を防ぐ：イヌは”心と心をつなぐ”看護師？看護師とイヌが協働し、孤立しがちな人の心をケアする仕組みを検証します。

医学医療

イヌと高齢者の介護予防

健康を支える：愛犬との散歩は”最高の処方箋”？犬を飼うことが高齢者の歩行量を増やし、介護予防に繋がる効果を検証します。

体育

イヌとスポーツ神経

活力を生む：イヌとの運動は”脳を元気にする”？犬との運動が脳機能の活性化やストレス軽減に繋がるか、科学的に検証します。

体育

イヌと若者の運動不足解消

未来を守る：イヌとの暮らしは”若者の健康投資”？犬との生活が自然な運動習慣となり、将来の健康を守ることに繋がるか検証します。

この研究がもたらす、つくばの未来像

世界が注目する「犬と幸せに暮らせる研究都市」へ

市民一人ひとりの
健幸(ウェルビーイング)
の向上

新たな産業と雇用の創出

国内外からの交流人口の
増加と地域の活性化

世代を超えた新しい
コミュニティの形成



Lifestyle
Innovation
TSUKUBA



F lab.

Landscape Ecological
Design & Planning
Research laboratory

Fujita Lab., University of Tsukuba
from 2010@KyushuU., since 2019@U.Tsukuba



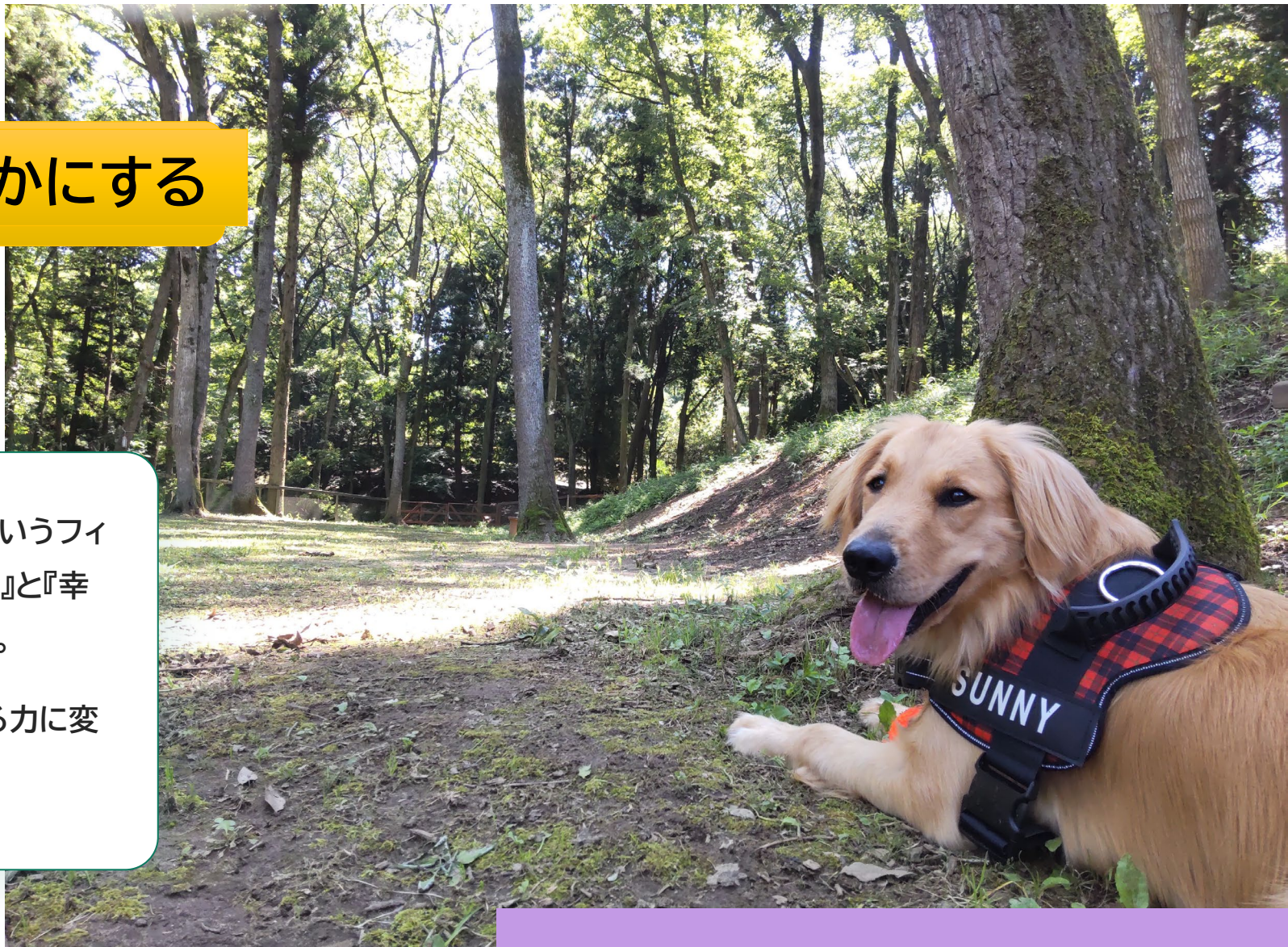
筑波大学
University of Tsukuba

愛犬との暮らしが、社会を豊かにする



筑波大学ドッグランドスケープ研究拠点は、“イヌ”というフィルターを通して、これからの社会に必要な『つながり』と『幸せ』をデザインしていく、壮大な社会実験として開設。

愛犬への想いを、つくばの、そして日本の未来を創る力に変える産学官民プラットフォームへ。



デザインが引き出す地域の未来：筑波大学の貢献



筑波大学、そして大学生・大学院生たちは、環境研究を推進する社会的触媒へ



つくば市は生きた実験室(リビング・ラボ)へ



- 「地域デザイン」こそが、学術を市民のウェルビーイングという共通の目的に向かって統合する「実践的プロセス」
- 市民は「科学的成果の受け手」から「社会課題の解決主体」へ